

ワークサンプル幕張版（MWS）新規3課題の活用ハンドブックの作成について（経過報告）

○藤原 桂（障害者職業総合センター 主任研究員）
 渋谷 友紀（障害者職業総合センター）

1 はじめに

障害者職業総合センター研究部門で開発したワークサンプル幕張版¹⁾（以下「MWS」という。）の新規課題²⁾（給与計算、文書校正、社内郵便物仕分）（以下「新規課題」という。）は、MWSの既存課題（以下「既存課題」という。）よりも、課題の難易度が上り、課題の構成や採点が複雑化した。そのため、支援者への負担が既存課題に比べて大きくなっていると考えられる。そこで本研究では、新規課題の活用方法をわかりやすく示した活用ハンドブック（以下「ハンドブック」という。）を作成することとした。

ハンドブックの作成に向け、新規課題の活用状況を調査するためのアンケート調査（以下「活用状況調査」という。）や、試作したハンドブックに対して意見を伺う外部有識者へのヒアリング等を行い、研究活動の過程を通してハンドブックの試作と改良を進めた。ハンドブックを完成させるためには、ハンドブックの活用が地域の就労支援機関の支援者に対して新規課題の活用イメージを与え、新規課題を用いた支援の実践を促す情報となり得るかについて評価を得る必要がある。そのため、試作したハンドブック（表1参照）を地域の就労支援機関に提供し、有効性について評価するよう求める試用評価を行った。本稿では、障害者職業総合センター（2022）³⁾の報告に続き、ハンドブックの試用評価の実施結果を報告する。

表1 ハンドブックの内容

1	新規課題の基礎知識	新規課題を活用する上での留意点を記載する。
2	活用モデル	新規課題の対象者像、新規課題を活用する場面、目的等を記載する。
3	活用事例集	活用モデルに書かれた内容を具体的に理解する資料として新規課題を用いた支援事例（活用事例）を掲載する。
4	対象者への対応方法	新規課題を活用する上で考えられる事案への対応方法を記載する。

2 試用評価の方法

(1) 試用評価を行う就労支援機関（以下「協力機関」という。）

協力機関は、活用状況調査に回答のあった機関の中で、

試用評価への協力の意思を示した4機関とした。しかし、その内の1機関は、試用評価期間中に新規課題の活用機会がなかったため、分析対象とはしなかった。

(2) 試用評価を行った期間

試用評価は2023年2月から5月の間に行った。

(3) 試用評価の内容

試用評価は、図1の実施手順により行った。以下、図1に従い実施手順と実施内容の概要を説明する。

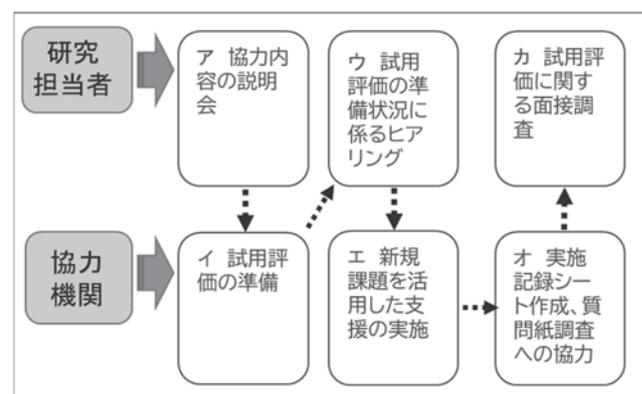


図1 試用評価の実施手順

ア 協力内容の説明会

研究担当者は協力機関に対して、ハンドブックを読んで新規課題を用いた支援を行う職員（以下「担当者」という。）と、支援対象者（以下「対象者」という。）を決めるよう依頼する。

イ 試用評価の準備

協力機関が、アにより説明した事項をもとに試用評価の準備を進める。

ウ 試用評価の準備状況に係るヒアリング

担当者を対象に、試用評価の準備状況を確認するためのヒアリングを行う。

エ 新規課題を活用した支援の実施

協力機関が新規課題を用いた支援を実施する。

オ 実施記録シート作成、質問紙調査への協力

協力機関が、支援を行った対象者の情報を「実施記録シート」に記入し、支援を行う上でのハンドブックの有効性に関する質問紙に回答する。

カ 試用評価に関する面接調査

担当者を対象に、オの対象者に関する情報や質問紙の回答結果及びハンドブック全体に関する意見等を聴取する。

3 結果と考察

(1) ハンドブックの利用効果

上記2(3)アの結果、担当者は協力機関3機関のうち2機関で各1名、1機関で2名、計4名となった。上記2(3)オの質問紙調査では、担当者に対して、ハンドブックを読むことにより①新規課題の対象者、②使用するタイミング、③使用する目的、④使用する効果について、イメージを持たたかどうか、4件法で聞いた。結果を表2に示す。

表2 ハンドブックの利用効果

	(単位:人)			
	非常に具体的なイメージを持た	少し具体的なイメージを持た	あまり具体的なイメージは持たなかった	全くイメージを持たなかった
①対象者	2	2	0	0
②タイミング(※)	1	2	1	0
③目的	2	2	0	0
④効果	2	2	0	0

(※)「アセスメント」、「復職に向けた訓練」など職業リハビリテーションの過程の中の場面、機会。

表2から、「新規課題を使用するタイミング」について1名が「あまり具体的なイメージは持たなかった」と回答し、それ以外は「非常に具体的なイメージを持た」、「少し具体的なイメージを持た」と回答している。この結果から、新規課題の活用方法をイメージする上でハンドブックの記載内容は概ね有効であると考えられる。

表3 ハンドブックによる支援への影響

協力機関	回答
A	ハンドブックが作られたことで、利用者の様々な側面を見ることができるとことが分かった。今後も利用者には行ってもらおうと考えている。
B	●今後新規課題の活用の幅が広がると思う。社内郵便物仕分以外の課題についても活用してみようと思う。 ●活用の仕方としては、アセスメントというよりも、対象者の方の職種や可能性などについて、イメージを持ってもらったり作業体験として使うという方法もあるかもしれない。
C	●法人内では既存課題は以前から使っており、新規課題は2年間程度使っている。新規課題に慣れていない職員にはハンドブックにより使いやすくなるのではないかと。 ●今後新規課題を使う職員が増えることも考えられる。 ●エラーのとらえ方や、来所者への新規課題の使用を検討する場合にハンドブックの事例を見ることが考えやすくなったと思う。

(2) ハンドブックによる支援への影響

図1の「カ 試用評価に関する面接調査」(以下「面接調査」という。)では、協力機関の支援者がハンドブック

を読むことにより起きると考えられる支援への影響について聞いた。表3にその結果を示す。

表3の、「(A) 利用者の様々な側面を見ることができるとことが分かった」はハンドブックが担当者に新しい視点をもたらしたことを示唆し、「(C) 新規課題に慣れていない職員は使いやすくなる」はハンドブックが新規課題の導入に活用できることを示唆すると考えられる。

(3) 新規課題に対する意見 (ハンドブックに関連)

面接調査で収集した新規課題に対する意見のうちハンドブックに関連した意見を表4に示す。表4の①②は、簡易版では訓練版の全レベルの問題が出題されるため、訓練版の低いレベルの問題よりも難しい内容になっている点を述べている。この点については対応策も含めて新規課題の特徴の一つとしてハンドブックに追記することを検討する。③は、サブブックの内容の理解が難しい対象者でも、支援者が説明等を行い、対象者が理解できた場合はどこまでできるのか、をアセスメントする視点もある、という指摘である。④はサブブックの読み込みに時間がかかり、作業に着手できない場合について述べている。この点については対応策等をハンドブックに追記することを検討する。

表4 新規課題に対する意見 (ハンドブックに関連)

番号	意見の内容
①	社内郵便物仕分について、簡易版は難しいので今のところ使う場面が見いだせない。
②	簡易版は難しいので、利用者の反応を見ながら行い、人によっては訓練版を使っている。
③	評価の視点としてサブブックを理解できるかどうか、を見ることは大事だが、やり方が分かった場合はどこまでできるのか、を評価することも大切だと思っている。
④	支援の中で、サブブックの読み込みで止まっている人がいた。ハンドブックに対応方法が書いてあると良い。

4 おわりに

以上の結果を踏まえ、引き続きハンドブックの作成を進めたい。

【参考文献】

- 1) 障害者職業総合センター『障害の多様化に対応した職業リハビリテーション支援ツールの開発ーワークサンプル幕張版(MWS)の既存課題の改訂・新規課題の開発ー』,「調査研究報告書No.130」,(2016),p.12
- 2) 障害者職業総合センター『障害の多様化に対応した職業リハビリテーション支援ツールの開発(その2)』,「調査研究報告書No.145」,(2019)
- 3) 障害者職業総合センター『ワークサンプル幕張版(MWS)新規3課題の活用モデルの作成について(経過報告)』,「第30回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集」,(2022),p.96-97